

# 2019 年度第 4 回講演会 記録

|     |                              |         |  |
|-----|------------------------------|---------|--|
| 日 時 | 2019 年 5 月 25 日（土） 13 時～16 時 |         |  |
| 会 場 | 此花会館梅香殿                      |         |  |
| 講 師 | 石川県立自然史資料館 館長 中村 浩二 先生       |         |  |
| 演 題 | 能登半島の里山里海づくり                 |         |  |
| 備 考 | 出席者数 164 名（会員 164 名）         | 記録 藤原雄平 |  |

## はじめに

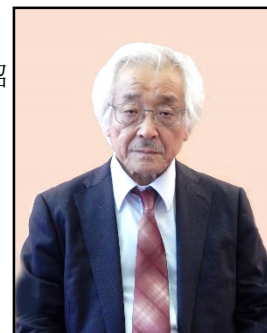
### 【田中克先生】

中村浩二先生のご専門は昆虫生態学ですが、金沢大学のキャンパス内に有る里山での研究教育に携われる中で、人とのつながりを大切にしなければならないとの思いを深められ、石川県珠洲市の廃校を活用して開設された金沢大学珠洲キャンパスを中心に、里山里海づくりの活動を世界的視野で進めてこられました。先生との直接のつながりは、京都大学フィールド科学教育研究センターを立ち上げた頃（2003 年）から、コナラやカシなど大きな木が立ち枯れナラ枯れが芦生の森にも広がり始め、その現状と対策などを検討するシンポジウムを京大フィールド研主催で開催した際、中村先生にお越しいただき、原因生物は 5 mm ほどの大きさのカシノナガキクイムであることやナラ枯れを防ぐ対策などをご紹介いただいたのが最初でした。その後、中村先生は、珠洲キャンパスにおいて、「里山マイスター制度」を設けて人材を育成に力を注いでおられます。そのような実績が高く評価され、世界的にも貴重な棚田を今後も保全活用する人材「棚田マイスター」の育成を、JICA のプロジェクトとして、フィリピン・イフガオにおいて進めておられます。

### 【中村浩二先生】

私は昆虫生態学が専門で、日本のみならずインドネシア各地で昆虫の個体数変動と多様性の野外調査を行いながら人材育成もしてきました（PPT で調査中の光景を紹介された）。一方、金沢大学の「里山里海プロジェクト」やフィリピン「イフガオ里山マイスター養成プログラム」、国連の里山イニシアティブ等に関わり、人材育成を日本だけでなく国際的にも行っていました。

里山里海の保全はボランティアだけでは限界があり、農、林、水産業に携わる人々や地域との連携、ことに若い人の育成が重要と考えています。1970 年代の里山づくりは都市近郊の里山を大切にしようとするものであったが、近年地方の過疎化や高齢化がいっそう進み、地方での切実感が高まっています。都市生活者には地方の現状を理解し、地方を支える力になってもらい、両者協働の里山里海づくりを念願しています。



## 1. 日本の自然環境

日本の自然環境を一言でいうと温暖多雨（※）で、森は国土の 67% を占め、海に囲まれた日本列島は豊かな生態系を持つ。農林水産業に恵まれた環境にあり、なかでも「里山里海」は最大の財産である。自然資源としての里山里海は農業、林業、水産業の全てに関係する。

※世界の主要都市の気候 (PPT 資料から 6 都市を抜粋) 理科年表 1999

| 都市     | 降雨量 (mm、年) | 平均気温 °C |
|--------|------------|---------|
| パリ     | 647.6      | 10.6    |
| ニューヨーク | 1068.8     | 12.4    |
| 北京     | 577.9      | 11.8    |
| サッポロ   | 1129.6     | 8.2     |
| 東京     | 1405.3     | 15.6    |
| 金沢     | 2592.6     | 14.1    |

金沢大学の角間キャンパスは金沢市中心部から 5 km の至近距離あり、30 年前までは集落があり、農林業を営む里山であった。ここに 200ha のキャンパスを設けたが、そのうち 74ha が里山ゾーンである。里山ゾーンには、コナラやアベマキなどの森と棚田がある。金沢や能登地方は湿潤で、気温が高く（まるで熱帯）、しかも冬には雪が降るという環境にある。大阪近辺でいえば、能勢町に似た環境にある。

## 2. 里山里海について

### (1) 里山里海の定義

「里山」は農林漁業などの人の手により形成されてきた農村生態系

「里海」は漁業などの人の手により形成され生産性と生物多様性が高い沿岸生態系

どちらも「適切な管理」により長年にわたり持続的に維持されてきたものである。

### (2) 里山はなぜ重要か

- ① 広い面積 日本国土の 40%、石川県では 60~70% を占める。
- ② 生態系サービス：生産（食料、木材など）、調節（森林、水田機能：水、空気浄化、騒音吸収など）、
- ③ 日本の風土、伝統文化（水田）
- ④ 生物多様性 等

### (3) 里山の「生態系サービス」

- ① 供給サービス：食料（米、野菜）、木材、遺伝資源・薬品
- ② 調整サービス：大気と水、自然災害の防止
- ③ 文化サービス：レクリエーション、伝統文化・祭り
- ④ 基盤サービス：土壌形成・栄養循環など

生態系と生物多様性の経済評価 ⇒ これらを人工物で代行すると、莫大な費用が必要

### (4) 能登の里海の「生態系サービス」(里海：九州大学応用力学研究所教授 柳 哲雄による提唱)

- ① 供給サービス：食料
- ② 調整サービス：水質浄化
- ③ 文化サービス：レジャー・教育
- ④ 基盤サービス：生息空間 栄養塩循環

## 3. 里山里海の国際化

国連の行動指針が発表され、多くの国でいろいろな里山活動が行われるようになった。能登の里山里海は、祭などの伝統文化を含めて、2011 年に世界農業遺産に認定された。

農業遺産の選定基準には、食料と生計の保証、生物多様性、文化・社会、景観、知識システムと技術の 5 ポイントがある。能登が選ばれた理由は、多様な生物資源、優れた里山景観、伝統的技術、文化・祭礼、里山里海の利用保全の取り組みや環境教育などによる。ヨーロッパでも認定の実例が出てきたが、

アジアでも中国の水田養魚システム、フィリピンのイフガオ棚田、韓国のハドン伝統茶園などが世界農業遺産に認定されている。世界農業遺産、日本農業遺産の認定を目指す地域は多数ある。

#### 4. 金沢大学の活動

角間キャンパス内にある 74ha の面積を持つ里山ゾーンで、金沢大学里山里海プロジェクト活動を展開。1999 年、里山自然学校を設立してボランティアを養成。2007 年、能登での若手人材（マイスター）の育成。2014 年、フィリピン（イフガオ棚田）と活動を広げてきた。廃校を移築して利用した交流センターでは、生物多様性調査、里山保全活動、子供の環境教育などを実施、併せて人材育成を行っている。能登の現状を言えば、人口減少は続き、若者は外部へ出て戻らず、農業遺産に認定されても問題の解決には全くなっていない。過疎化・高齢化による管理不足から、希少種の保全や有害種・外来種の規制が出来ない状況にある。文化面でも問題は山積し、例えば輪島漆器の職人が半減している。対策として、若手マイスターの育成が課題であり、2006 年に里山マイスター養成プロジェクトを動かし始めた。現在では養成期間を終えた若者たちがいろいろな分野で活動を始めている。彼らの半分は女性であり、平均年齢は 30 歳前半、1/3～1/4 が I ターン、U ターンである。

#### 5. フィリピンでの人材育成

フィリピンのイフガオ棚田は 2005 年に世界農業遺産の認定を受けたが、2012 年には危機遺産認定となった。これは無秩序な観光開発、放棄田の増加から棚田の景観が劣化したことに因る。そこで人材育成が必要となり、イフガオ里山マイスター養成プログラムが作成された。能登のシステムをイフガオに適用させ、イフガオ棚田と能登里山里海との連携による効果を柱に、2019 年までに成果を出して今後に繋げたい。マイスター養成講座の修了生は、オーガニック養豚業、イネ原料のワイン製造、伝統米の生産、織物やゲストハウスの経営等多種の分野で活躍しており、マイスター育成の成果が得られている。フィリピン（イフガオ）から能登へ、能登からフィリピンへ、お互いにますます交流し研修し合う様になって欲しい。現時点では日本からフィリピンへ研修に出かける人がフィリピンから来る人に比べ少ない。

#### 6. まとめ

世界中で過疎化、高齢化、移民・難民問題がどんどん大きく深刻化している。里山里海も今後どうなっていくのかが懸念され、ますます人材育成の必要性が高まると思われる。

里山里海は何を売り物にして生き残るのか？ 高齢化や GDP に占める率など、農林水産業は厳しい状況におかれている。生物多様性（例えばトキ）を取り込む、種々の経験を積み重ねてグローバルな展開を考えるなどの知恵と工夫が必要である。

里山マイスター養成事業の今後については、能登もイフガオもそれぞれに自立した存在になること、そして両者が連携して高め合うこと、どうしたらよいかを考えることが大事である。

能登の里山里海は世界的に見ても素晴らしいふるさと資源（自然と文化）であり、持続すべき存在である。

#### 【田中克先生コメント】

今日の中村先生のお話の中心は里山里海の保全や再生。森里海の中では里の話であり、里の話は人の話。人と言えば世代をいかに繋いでいくか、すなわち人材育成が大きな問題である。中村先生は能登とイフガオで時間軸と空間軸をまたぎ、多様な取り組みをされてきました。日本は自然豊かな国であるにもかかわらず、日本の幸福度は 58 位と低いのはなぜなのでしょう。最近の日本はことを急ぎ過ぎ、結果ばかりを重視する傾向が強まっています。これではダメで、もっとプロセスを大事にする必要がある。直近に実施した

シーカヤックで漁村を巡る「若狭湾海通路」での高校生との交流で、小浜市で 1 番の進学高校と当時は底辺に低迷していた水産高校が統合され、レベルの違いが当初問題視されたが、海洋学科の生徒にはそれぞれが研究課題を決めて勉強を進めさせた結果、学力が向上し自ら考える習慣や能力を身に着けた生徒が増加し、旧来の知識詰め込み型の進学教育の見直しにもつながりつつあるそうです。その陰には（中村先生のように）人材育成に情熱を持った熱血教師の存在があったということです。改めて、豊かな自然を生かし、地に足をつけて賢く生きる暮らしや文化の大切さ、それを維持継承、発展させる人材の重要性を学ぶ講演となりました。

以上